

稲作の努力

嘉永3年(1851)、玄米24石・60俵を収穫

1600年代後半、幕府は蝦夷に稲作を根付かせたい、各地に命じ試みられた。元禄5年(1692)、米を収穫した記録と伝承により大野村に北海道水田発祥之地碑が建てられた。

文化2年(1805)、幕府や民間が大野村などに大開田したが3年で中止した。稲作は暫く顧みられなかった。

弘化元年(1844)高田万次郎は、父・松五郎と駄送、炭焼き、浜へ出稼ぎの傍ら、後の新七重道(現本町)に3町5反(3.5 畝)開墾し畑とした。

嘉永元年(1848)、水田に切り替え同3年、玄米24石(60俵)を収穫した。蝦夷地で個人の作付けでこれだけの収量をあげたのは初めての事だった。

村民は、冷ややかな目で見えていたが成功を知ると争うように米づくりをしたという。



光明寺に建つ万次郎の墓

大野に金字塔

～蝦夷地で初めての租米～

万次郎が収穫を得て6年後の安政3年(1856)、稲作農家は箱館奉行所の奨励もあり急増し、前年に引続き気候も順調、豊作だった。

この年から仮に定められた田租、玄米71石8斗1升6合(10.77ト)は、箱館奉行所の倉庫に収められるものであった。

しかし、蝦夷地で取れた最初の租米なので、箱館奉行は翌年、伊勢両宮・宮中・日光東照宮に進献するため江戸へ回送し、触書が出されるなどの話題を呼んだ。

「松前箱館雑記」

明治6年、漁村島松(現北広島市島松)の中山久蔵が、大野へ来て相当日数滞在し、持ち帰ったイネ品種・赤毛は道央へ広められた。



稲穂が垂れる大野平野

緑綬褒章受賞

業績・受賞

◎田畑の開墾 253町歩(253 畝)

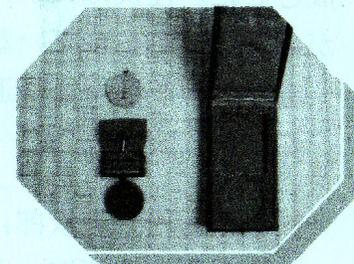
◎仕上げた用排水の長さ 33185間(60 町歩)

◎植林 10町歩(10 畝)の貸付を受け、松・杉・くりなど2万本植栽

◎公職 明治19以降総代・郡総代に推挙されたが、公職は自己に適せずとして、どちらも早期辞退

◎荣誉 緑綬褒章 明治25年11月15日(郷土における褒章第一号、道内では二番目)

◎開道50年 拓殖功労者彰 大正7年(故人)



○昭和25年 褒章徽章 (1950)、町村政施行50年式典で功績者賞(故人) 『大野町史』

緑綬褒章

郷土最初の稲作実績。水田60余町歩の開墾(大野町史)